

プラトン『国家』における問答法と徳

川島 彬

はじめに

本稿の主題は、プラトン哲学における問答法と徳の獲得との関係である。

プラトン（以下P.）において、真に有徳な生は、正しい仕方哲学をすることによってのみもたらされる。*Rep.* VI-VII は、P.にとって、問答法を極め〈善〉に関する知を得るまでは、ひとは真に有徳な者になることはない、ということを強く示唆する。同箇所、将来カリポリスの統治者となるべき者の教育プログラムが叙述される。それは、算術、平面幾何学、立体幾何学、天文学、音階学の5つから成る数学と問答法とに大別され、数学は問答法の「前奏曲」と位置づけられる（521c1-531e5）。これら一連の学習は、ソクラテス（以下S.）によれば、〈善〉のアイデアの観得を目指すものである。〈善〉によってこそ、正しいものも他のすべてのものも、有用・有益になる（505a3-4）。その意味で、〈善〉が「学ぶべき最大のもの（μέγιστον μάθημα, 505a2）」であり、この学習抜きには正しいものや美しいものについても十分に知ることはできず、完全な統治者たり得ない（506a4-b2）。もちろん、彼らは真に有徳な人物として想定されている。

問題となるのは次の点だ。すなわち、P.が思い描く問答法は——その内実がいかなるものであれ——アイデアを対象にしている。しかし、なぜひとがアイデアに関する知を獲得することが、そのひとが真に有徳になることを意味する、とP.はみなしているのか。この点について、P.ははっきり論じてはいない（それゆえ様々な解釈が提案されてきた）。本稿では、特に*Rep.*における問答法、数学、徳の獲得の関係を検討することで、上記の問いに一つの答えを与えたい。

1. 定義の知に対する Rowett の懸念

次のように解することは少なくとも可能であろう。すなわち、P.は結局のところ本質主義者（essentialist）なのだから、——それを正当化し得るいかなる論拠を持っていたにせよ——真の徳は、諸徳や、関連する諸価値（善や正義も含む）にきちんと定義を与え、それによって、その本質の知を獲得することでもたらされる、と考えている。実際S.が*Meno* やその他の初期対話篇で行っているのは、徳の定義探究に他ならないからである、と。この解釈路線に立つならば、中期対話篇の*Rep.*においても、統治者たるべき者が真に有徳な者であるとされている主な理由は、彼らは問答法の学習を通して、善や正義や勇氣といった事柄をきちんと定義でき、その限りにおいてこれらに関する知を持っているから

である、ということになる¹。

近年、Rowett が、P.の認識論に関する単著を公刊し、この種の解釈をしりぞけるための議論を提示した。Rowett の主張は次の通り。問答法によって獲得が目指される知とは、諸徳や善の定義の知ではない。たしかに初期対話篇で、S.が諸徳を定義しようと試み、結局は失敗する様が描かれているが、これによって著者P.は、諸徳を定義することを推奨しているのではない。その逆である。P.はこのような描写を通じて、哲学において諸徳の定義を求めることの不毛さ、そして、S.の定義探究プロジェクトの欠陥を示しているのである²。

Rowett は、定義の獲得を目指す「S.的」探究方法に、P.自身が支持していると彼女が解する、似像や模範的事例を用いた探究方法を対置する³。彼女は後者のこの方法を、*Rep.* VI-VII で叙述される哲学的問答法に大まかに対応するものとみなす。残念ながら彼女は、その内実について詳述していないが、S.が *Rep.*で〈善〉を論じるやり方とも共通する点があるとみなし、当該概念の本性をアナロジーによって把握するような方法がその一例であろう、と考える⁴。

Rowett がこうした非標準的なP.解釈をとるに至ったのは、次のような理由からである。第一に、「善」のような概念が単一の定義によって表現可能な本質を持っているという考えは、哲学的に有望でないかもしれない。ウィトゲンシュタインが「ゲーム」の例に訴えて論じるように⁵、ある物事が何であるかを、それについて定義を与えること抜きに完全に理解することは可能かもしれない。また、「ゲーム」同様「善」に関しても、そのすべての個別事例に当てはまるような定義は存在しないかもしれない。その場合、善の本質を定義の形で捉えようとする試みは、最初から失敗する運命にあることになる。第二に、ひとを真に有徳な者たらしめる知が、それ自体として一定の定義の形をとるとは考えにくい。その内容がいかなるものであれ、ひとがある定義を学び知るだけで、完全に善き人、完全に有徳な人になり得るとは想定しがたいからである。

Rowett のこの解釈は、P.における定義の扱いに関して、明らかに行き過ぎている。彼女の解釈によれば、P.は少なくとも *Rep.*を書いた後、徳の定義を求める「S.的」探究から完全に袂を別ったことになる。しかし、後期対話篇で例証される問答法は、当該の事物の定義を捉えることを目指した営みとして特徴づけるのが自然であろう。彼女の解釈に反

¹ このような解釈の一例として、Fine (2003), 1-15, 112-16.

² Rowett (2018), 26-27.

³ Reeve (1988), 22-24 も、P.は *Rep.* I以降、初期のS.的探究方法（エレンコス等）を破棄したと考える。

⁴ Rowett (2018), 160-62. もちろん、問答法において用いられるのは可視的な似像ではなく、いわば概念的似像であろう、と彼女は考える。

⁵ *Philosophische Untersuchungen* §75. Rowett (2018), 55-56 も参照。

して⁶、*Soph.*や *Pol.*における、分割と総合からなる問答法の長大な議論を、P.自身がコミットしていない探究方法のアイロニカルな描写として理解するのは（不可能とまでは言わないにせよ）困難である。さらに、最晩年の対話篇である *Laws* においても、P.は、諸徳の関係を把握し、それらに定義を与える能力を持っていることを、人が真に有徳であるための重要な条件とみなしていると考えられるからである（XII 964a-d）⁷。

とはいえ、善に関して完全無欠の定義、例えば、他の規範的な語に一切訴えることなく、その本質を余すところなく記述できるような定義を与えることは不可能であろう、と考える点では Rowett は正しいと思われる。それゆえ、P.は、そのような完全無欠の定義を与える能力を持つことを、有徳な人になるための条件とはしなかった可能性が高い⁸。しかしこれは、P.が初期対話篇で描かれた「S.的」定義探究のプロジェクトを完全に放棄したということも、P.自身が推奨している探究方法において、定義を求めることがいかなる実質的な役割も果たさない、ということも意味しない。先述のように、後期対話篇でP.は、彼女が思い描くのと異なる方向に向かっているからである。では、問答法と定義探究の関係をどのように考えるべきか。

2. 問答法と数学に関する Burnyeat の議論

問答法における定義探究の身分を正しく理解する一つの方法は、諸事物の本質の探究というより広範な文脈の内にそれを位置づけることである。Burnyeat（以下B.）は、この線の解釈を提示している⁹。B.は、カッリポリスの統治者のための教育プログラムの描写の、いくつかの謎めいた特徴について問う。S.は、彼らは哲学的問答法の学習に向かう前に、10年もの長期間にわたり、幼いころ雑然と学んでいた数学的諸学問の¹⁰「相互の間の、また、実在の本性との、内的結びつき」を総観するよう努めなければならない、と言う（537b7-d8）。なぜP.は、問答法の前に、それほど長期間の、そこまで高度な数学を学ぶ

⁶ Rowett (2018), 273–75.

⁷ さらに、係争中の論点ではあるが（cf. Broadie (2021), 72–75）、*Rep.* 534b3-d2 では、問答法によって〈善〉の定義を与えることは少なくとも原理的には可能であるとされている、と解するのが自然である。

⁸ この点は、P.が（成功している）定義の実例として与えているものからも示唆される。例えば *Thet.* 147c5–6 でS.は「粘土（πηλός）」の定義として「土に水を混ぜたもの」を与えるが、油粘土など、この定義から外れる粘土もあり得るかもしれない。定義を求めることは、探究を促進させるという意味で重要なのであり、ある事物のアイデアの知は、その事物の定義を知ることには他ならないとされているわけではないだろう。P.における定義と知の関係について、田中 (1990), 251–279 の議論が極めて有益である。

⁹ Burnyeat (2000).

¹⁰ 数学以外の学科、例えば、音楽・文芸や体育も、ここで結びつきを総観されるべきものとして含まれている可能性はあるが、主として話題になっているのは数学だろう。

必要があると考えているのか。数学的諸学問の「相互の間の、また、実在の本性と、内的結びつき」を総観するとは、一体どのようなことか。

これらの問いに対するB.の答えは次の通り。P.は、数学の学習を通じて獲得される、事柄の全体を見渡し、体系的な思考を働かせる能力を、〈善〉についての知の実質を成すものとみなしている。数学は、〈善〉についての知を得るための単なる手段とみなされているのではない。実際、数学的諸学問のそれぞれを別個に学んでから、問答法の学習に至るまでの過渡的段階においても、目下の考察対象をより広い文脈の中に置くことが、研究の進展にとって極めて重要であるとされているからだ。S.は言う。それぞれの数学的諸学問を学び終えた者は、次に、互いの「内的結びつき (κοινωνία)」と「親族関係 (συγγένεια)」を把握し、それらがいかなる仕方で互いに親近な繋がりを有するかを総合的に考察しなければならない (531c9–d3)。また、「総観の能力を持つ者」が問答法の能力のある者であり、総観の有無こそがその素質を判定する「最大の試し」なのである (537c6–7)、と。これは他でもなく、数学によって学び取られる、様々な概念を適切に結びつけ、その全体を把持するような体系的思考が、問答法の営為の実質を成すことを示している。求められる体系的思考は、算術、平面幾何学、立体幾何学、天文学、音階学と学習が進むに従って、また、数学的諸学問から問答法に進むに従って、より抽象的で高度なものになっていく。以上のようにB.は解するのである¹¹。

B.は問答法それ自体の内実に関しては多くを語らないが、彼の議論の進め方は、それが数学基礎論 (メタ数学) の研究に相当することを示唆する。問答法に携わる者は「数学的仮設を始原 (511b: ἀρχάς) として扱うことを止め、それら仮設をイデア (511bc) に即して説明しようとする」のだが、この段階にあっても、学習の中身は極めて数学的である¹²。B.によれば、「統治者の教育はどの道、頂点に至るまでずっと数学的」なのだ¹³。〈善〉は一方で倫理的イデアであるが、数学的仮設を含む万物を説明するための究極の原理でもある。したがってP.は、倫理学 (及び政治学) を「数学化」するとともに、数学を「道徳化」しようとしているのである¹⁴。

このようにして、諸事物の定義探究もまた、問答法の実践の内に包摂される。善を含む諸価値の定義もまた「数学化」されることで、より広範な (メタ) 数学的探究の一部となり、諸価値 (および諸徳) に定義を与えることは、それらを (メタ) 数学的に基礎付けることに他ならない、ということになる。問答法のこのような描像を、われわれは受け入れ

¹¹ Burnyeat (2000), esp. 5–6, 67–70. 彼は、数学的思考が教育カリキュラム全体において一貫して重要視されている点は、問答法が仕上げの「冠石 (θριγκός, 534e2)」とされていることから示唆されると考える。

¹² Burnyeat (2000), 38.

¹³ Burnyeat (2000), 45–46.

¹⁴ Burnyeat (2000), 76.

るべきか。

3. いかなる意味で「統合」は問題になるのか

数学と問答法に関するB.の解釈は、大まかな方向性においては正しいとみなし得る。しかし、そのままの形では、P.に説得力のない立場を不必要に帰する危険性が高い。論争状況を整理するために、この点に関するGillの論考を参照したい¹⁵。なぜP.は、問答法に赴く前にこれほど長期間、高度な数学を学ぶ必要があると考えるのか。Gillは、この問いへの答えとして従来提案されてきた、4つの主要な解釈を並べる。すなわち、数学が課されるのは、

- (1) 単に、数学が学習者の精神を鍛練・研磨するために役立つから。
- (2) 数学の学習と善の学習との間には、ある種の類比的関係が成り立っているから。
例えば、両者はともに、妥当な推論を構築することや、公平に他者の議論を評価することを重んじるという点で似ているから。
- (3) 数学と善の学習の両者は、ともに「統合 (ἐν)」とは何かを学ぶ営為であるという点で、一続きの同じ学問を形作っているとみなすことができるから。
- (4) (3) が成り立っているのと同時に、数学の学習は、統治者が具体的な実践を行う際に直面する諸問題に適用できるような、統合・調和・比率などに関する知を与えてくれるから。

問答法が「数学化」される程度は、(1)から(4)の順に高まっていく。

解釈(1)¹⁶は、問答法の前に10年間も数学を学ばなければならない理由を十分に説明してくれない。また、問答法の「前奏曲」がどうして特に数学でなければならないかも説明してくれない。必要な忍耐力や頭の回転の速さを身につけさせるために、学習者の精神を訓練することが主な目的なら、少なくとも同程度に相応しい学科は他にもあり得るだろう。(1)で前提されている考えは、幾何学と天文学に関するイソクラテスの見解に近い。彼もまた、数学の効用は、学習者の魂をより鋭敏かつ忍耐強くする点にあるとする。しかしP.とは異なり、若者は才能を枯渇させることがないように、数学に過大な時間を費やすべきではないと戒める¹⁷。

¹⁵ Gill (2007).

¹⁶ 解釈(1)の支持者として、Shorey (1937), 235–36; Cherniss (1945), 66; Irwin (1995), 301–302など参照。

¹⁷ Cf. *Antidosis*, 261–69, *Panathenaicus*, 26–28. 類似の見解として、*Xen., Mem.* IV 7. 2–8. ここでS.は、数学が必要なのは、航海など実践的使用に寄与する限りにおいてだと言う。また、*Prot.* 318d–eでプロタゴラスは、自分が教えるのは算術や幾何学など——これらは学ぶ若者を不必要に痛めつけてしまう——ではなく、公私ともに有能・有為な者になるための術であると言う。

解釈（2）は、今日の P. 研究において、B. に対する最も典型的な反応の一つである。〈善〉の学習、つまりは問答法の内実をどう解するかは（2）の支持者の間でも異なるが¹⁸、彼らは次の点ではおおむね一致する。すなわち、事実として、数学と、〈善〉の学習（われわれにとっての倫理学を少なくとも含む）は基本的に別個の学問領域を構成していると考えられるのだから、両者の違いを解消しかねない立場を P. に帰すことには慎重になるべきだ、とみなす点で一致する。数学と〈善〉の学習（大まかに言えば倫理学）の間にはある種の類比的関係のみが存在している。このように考えるだけで、*Rep.* における数学の扱いを理解するには十分であろう、と彼らは解するのだ。

一見したところ、B. が解釈（3）¹⁹、すなわち、P. にとっての、善と統合との緊密な結びつきに訴える解釈路線の「弱い」方をとっているのか、解釈（4）²⁰、すなわち、同解釈路線の「強い」方をとっているのか、判定し難いかもしれない。しかし B. が、P. においては、有徳な個人の魂、よく統治された国家、そして宇宙全体の三者は、共通のある類比的な構造を有していると述べる際、彼の論じ方は（4）への傾斜を強く示唆する²¹。B. 曰く²²、「S. が *Phd.* (99c) で表明した渴望——善こそが諸事物を結びつけるものであることを示してくれる、新しい種類の学問的説明に対する渴望——をついに満たしてくれるのは、数学的比率なのである」。問題の *Phd.* 99c——S. がアナクサゴラスの自然学への失望を打ち明ける文脈——において、善は文字通り万物を結びつける原因とみなされている。したがって、この箇所を引く B. は、*Rep.* のカッリポリスの統治者が学習する事柄と、彼らの統治のあり方との関係を、次のように理解していると考えられる。すなわち、彼らが〈善〉の学習を通して学び取るものは、ある数学的比率についての知であり、この比率を個人の魂や国家を含む諸事物に、また、具体的な様々な状況に当てはめることによって、「正解」を導き出し、関連するあらゆる物事に可能な限り最善の仕方で対処できるように

¹⁸ 第 1 節で見た Rowett (2018) は、解釈（2）の一種をとっていると考えられる。（2）の有力な支持者として、他に Broadie (2021) 参照。彼女は、B. 流の解釈を主に次の二点から批判する。第一に、すぐれた統治者になるためには、数学の基礎付けのようなことする必要があるとの考えは、理解しがたい。第二に、「善」のような倫理的な概念が本質的に数学的なものであるとの想定は、事実と反していると考えられる。

¹⁹ Gill (2007) は自身の立場を明確にはしていないが、（2）や（3）により高い説得力を認める。

²⁰ 解釈（4）の支持者として、Gosling (1973), 102–3; Sedley (2007), 269–71 参照。

²¹ Burnyeat (2000), 74–75. Gill (2004), (2007); Kamtekar (2007) も、Burnyeat に解釈（4）を帰する。Burnyeat に関するこの理解は正しいと考えられる。Gill は、Gill (2004) 及び (2007) の草稿を Burnyeat 本人にも見せ、口頭及び文書の形でコメントを貰っているからだ。Gill (2007), 251 参照。

²² Burnyeat (2000), 75. 引用者強調。

なるのである、と²³。

以上で見た通り、*Rep.*でのP.の数学重視の理由を適切に説明し得る解釈は、実質的には、解釈(2)(3)(4)の三つに絞られる。本稿はこのうち(3)を支持する²⁴。以下で、(2)と(4)が内包する問題点をそれぞれ明らかにし、(3)が最も有望であることを示したい。結論を先取りすれば、(2)はテクスト的に支持しがたく、(4)は有望でない哲学説をP.に帰する可能性が高いため、支持しがたい。

解釈(2)から始めよう。この解釈によればP.は少なくとも暗黙のうちに、〈善〉の学習(大まかに言えば倫理学)を数学とは区別される、独立した学問領域として措定しており、〈善〉のアイデアが前者(すなわち、倫理学)の領域を統制している一方、何か別のアイデア、おそらくは〈統合〉あるいは〈一〉のアイデアが数学の領域を統制しているとみなしていた、ということになろう。しかし、第一に、この見解は、〈善〉についてP.が行ったとされる講義に関するアリストクセノスの報告に反している。彼が師アリストテレスから繰り返し聞いたところによれば、この講義でP.は、聴衆の期待に反して数学(算術、幾何学、天文学)に関して語り、結論として「〈善〉は〈一〉である」²⁵と述べた。この発言は、〈善〉が〈一〉に他ならないことを意味していると解するのが自然である。もし(2)が言うように、〈善〉の学習(倫理学)と数学が単に類比的関係によって結ばれているのだとしたら、P.は例えば「〈善〉は〈一〉と似ている」と言ったはずであり、両者の同一性を強く示唆する当該の発言は理解しがたいものになる²⁶。第二に、仮にアリストクセノスの報告を無視するとしても、(2)は*Rep.* VIIの「洞窟の比喻」の描写に反している。ここで〈善〉のアイデアを表わしている太陽は、万物の原因として繰り返し特徴づけられ(516b4-c2, 517b7-c4)、洞窟の外の世界(可知的領域)に、太陽とは別の何かによって管轄される領野があることを示唆する描写は、いささかも与えられていないからだ。以上から、(2)が前提するような、〈善〉の学習(倫理学)と数学の領域の区別をP.が暗に行っていたとは考えにくい。

これに対して、解釈(3)と(4)はどちらもテクスト的に十分支持される。しかし

²³ この点について、Burnyeat (1987), 238-40 も参照。

²⁴ Broadie (2000), 189, 191-93 は、(3)に相当する解釈に一定の説得力がある点は認めているように思われる。ただし彼女は結局(2)を支持する。Ferrari (in Griffith (2000)), xxix-xxxi も参照。

²⁵ “...καὶ τὸ πέρας ὅτι ἀγαθόν ἐστὶν ἓν”. *Harm.* II 30-31, Macran. “τὸ πέρας”を「ついに」を意味する副詞としてはとらず、「限定こそが〈善〉すなわち〈一〉であると……」のように訳す解釈もある(Guthrie (1978), 424)。いずれにせよ〈善〉と〈一〉の同一性は含意されていると解するのが自然な読みであろう。Guthrie (1978), *ibid.*; Gaiser (1980), 5; Burnyeat (2000), 80; Berti (2004), 37-41; Gill (2004), 165, (2007), 251 など、近年の論者は立場を問わず広くそのように解する。そのように解さない論者として、Cherniss (1945), 1, 57-59; Vlastos (1981), 393-94.

²⁶ この点の指摘として、Gill (2007), 266-67.

(4)、すなわちB.の解釈には、われわれの具体的な実践を不必要に数学化し過ぎるとい
う、別の恐れがある。ある実践において道徳的に正しい判断を下すような場合、われわれ
は、数学の学習から得られた特定の知識を所与の個別事例にそのまま適用する、というこ
とは行っていないと考えられる。〈善〉の知は、単なる理論知ではない。カッリポリスの
統治者が統治に関わる事柄に適切に対処することを可能にするものでもある²⁷。彼らが統
治に関わる具体的な仕事（国制の制定、次世代の統治者の選抜、立法・内政、外交など²⁸）
に取り組む際、特定の種類の数学的統合・調和・比率の把握に訴えて個々の判断を下すと
いうのは、少なくとも考えにくい。むしろ、こうした場合に彼らが訴えるのは、いわば、
統合・調和・比率一般の把握であろう。

例えば、統治者が、深刻な災害（地震や津波など）に見舞われた地区に住む人々に補助
金を支給することを決めたとしよう。統治者は、富の偏在はよくないことであり²⁹、被災
した人々の損害は補償されるべきであること、また、こうした支援を与えることは、国全
体の結束を高める³⁰のに寄与することを理解している。このような場合、むしろ、統合と
は何であるかに関する統治者の把握が、目下の政治的判断に反映されることになる。し
かし、この判断を、数学的統合の把握を適用することで下されたものである、と記述する
のは不適切であろう。実践に関わる状況は、それが置かれた文脈や具体的な内情に応じて
固有の質をそなえており、それを数学的に、例えば、特定の数式の形に落とし込んで余す
ところなく理解するなど、そもそも不可能だからである³¹。

本稿が明確化したいのは次の点である。数学と問答法とが、統合に関する学習者の理解
を高めることを目的とする一連の学問を構成していると主張することと、問答法が最終的
に把握するもの、したがって、問答法を究めた者が道徳的判断を下す際にそれを参照する
ところのもの（すなわち〈善〉）が、それ自体、数学的統合であると主張することとは、
別個の主張である。解釈（4）は良くも悪くも、これら両方の主張にコミットしており、
その意味で極めて一貫している。しかし先ほど論じたように、前者の主張が妥当であると
考えられる一方、後者は事柄として疑わしい。そして、前者の主張——数学と問答法とは、

²⁷ この点について、川島 (2024), 第1章で詳しく論じた。

²⁸ それぞれ、*Rep.* 501a9–c3, 412d9–414a6, 425c10–e4, 422d2–8 参照。

²⁹ *Rep.* 421c10–422a3 で、貧乏と富が職人たちを劣悪にしてしまう危険性が語られる。

³⁰ この点がカッリポリス運営にとって極めて重要であることの指摘として、特に *Rep.* 462a9–e3 参照。

³¹ Burnyeat (2000), 56 は、カッリポリスの統治の仕事においてより重要なのは、個別的な状況における意思決定ではなく、魂や国家の内に善き秩序をもたらし、これを維持することの方であると正しく指摘する。しかしこれは本稿が提起している問題の解消には結びつかない。魂や国家に善き秩序をもたらし、維持することもまた、数学的比率の直接的適用によってなし得るとは考えにくいからである。

統合に関する理解の促進を目指す一続きの学問を構成している——は、P.にとって数学的統合こそが、有徳な個人の魂、適切に統治された国家、そして宇宙全体をはじめとした諸善を貫いているという、より強い主張にコミットすることなく維持できる。P.にとって、数学的統合は統合の代表例である。この点を確立するだけで、数学が問答法の前奏曲として置かれている理由を説明するのに十分である。統治者の教育カリキュラム全体は、諸々の要素が統合されるとはいかなることかを学び続けるという点で一貫している³²。その際、目下学んでいる種類の統合が数学的なものかどうかは、学習の到達段階によるものと考えられる。

4. 学習対象への「類似化」

以上で、P.にとって、数学と哲学的問答法が一続きの学問として結ばれているのは、両者は統合とは何かを学習するという点で共通だからである、とする解釈を擁護した。問答法においても統合の学習が重要となるのは、問答法が把握しようとするもの、すなわち、〈善〉によって秩序付けられている諸アイデアの全体が、高度に組織化された一つの体系を形成しているからであろう。数学は、実在のうち数や形と関連した領域のみを考察するが、問答法にはそのような制限はない³³。問答法は、実在のすべての領域を扱い得る営みとみなすのが適当だろう。

問答法において、事物の本質を規定する定義を探究することが重要なのは、あるアイデアに定義を与えるには、関連する諸アイデアとの関係を正しく理解することが必要だからであり、また、このように諸アイデア間の関係を把握することが、統合とは何か、すなわち善とは何かの学習の内実をなしているからである（このように解する限りでB.は正しい）。例えば、問答法によってある事物を定義しようとするとき、当該のアイデアを包摂する「より大きな」アイデアを把握し、その内に位置づける、といった手続きが多くの場合求められるはずである。こうした手続きが必要なのは、アイデアの領域全体が包括的な種類体系のような形で統合されているからだろう³⁴。

しかし、問答法についての以上の説明は、再び問いを喚起する。P.は、アイデアの体系がいかに統合されているかを問答法によって学ぶことで、学習者は真に有徳な者になると考えているが、それはなぜか。本稿の残り、この問いに対する答えを素描したい。

この点を論じる際、B.の次の洞察が手掛かりとなる。B.によれば、P.は知のある種の「受容性 (receptivity)」に依るものであると考えている³⁵。P.にとって、学習者は「魂を、

³² 統治者が幼年期に受ける音楽・文芸と体育による教育も、統合への感受性を養うための学習として位置づけることができるかもしれない。

³³ Cf. Fine (2003), 114–16.

³⁴ この点について、Seel (2007) も参照。

³⁵ この点ではP.はアリストテレスと同じである。特に EN 1139a8–11 参照。ここで、「知

客観的な意味において成立している世界によって形相を吹き込まれるべく (to be in-formed) 差し向けることで、魂を實在の本性と近いものに変化させるのである³⁶。B.はここで主に、数学の学習によって魂に生じる変化について論じており、それゆえ、天文学が話題になっている *Tim.* 90c-d——われわれは損なわれてしまった頭の中の回転を矯正するために、自らの内の神的な部分と同種の動き、すなわち、宇宙の思考と回転運動とに従うべきである、と言われる——を典拠として引く。

しかしP.にとって、考察対象へのこのような「類似化」が起こるのは、数学や天文学に限った話ではない。アイデアを考察対象とする問答法においても生じるとされているはずである。すなわち、問答法によって、實在の全領域、つまりはアイデアの体系を考察することによって、学習者の魂はそれと似たものに変化する、とP.は考えている（典拠は以下で述べる）。先に述べたように、アイデアの体系は極めて高い統合性を示す一つの全体を成している。したがって、この全体に似たものになるということは、魂が人間に可能な限り最高度に統合され、秩序付けられることを意味する。P.にとってこれは、魂が有徳なものになることに他ならない³⁷。それゆえ、問答法によって真の徳が得られるとみなされているのである。

さて、(a) 哲学者が考察する対象は統合されたある全体を形成しており、(b) この全体を考察することによって学習者の魂は善きものになる、という考えが、最も明瞭な形で述べられているのは、*Rep.* VI, 500c3-d3 である。ここでS.は、(a) 哲学者がその観想を熱望する「有るものども (τὰ ὄντα)」(文脈上、諸アイデアを指す)は、「秩序付けられており (τεταγμένα)」³⁸、「すべて秩序と理法を保ちながら (κόσμω...πάντα καὶ κατὰ λόγον ἔχοντα)、互いに不正を犯すことも、不正を犯されることもない」と言う。S.は続けて語る。(b)「哲学者は、神的で秩序あるものと (θείω...καὶ κοσμίω) とともに生きるのだから、

(γνώσις)」が成り立つのは、知られる側と知る側との「ある類似性と親近性による (καθ' ὁμοιότητά τινα καὶ οἰκειότητα)」以上、知られるものの類が異なるのに応じて、対応する魂の部分もそれぞれ類において異なる、と言われる (cf. *De An.* 404b16-27)。この点について、Moss (2021), 67-79 も参照。

³⁶ Burnyeat (2000), 70. Brisson (2012), 382 も参照。

³⁷ *Rep.* では、国家の三階層が統合されていることが国家の徳であり (423b5-d7, 433a1-434c11, 462a9-e3, 551d5-7)、魂の三部分が統合されていることが魂の徳であるとされる (410b10-412b2, 443c9-444e5, 554d9-e7, 586e4-587a2, 588b1-590a5)。 *Grg.* 503d5-505d4, 506e2-4, *Phil.* 23e1-26d10, 62a2-64e4 も参照。

³⁸ P.において“τάξις”及びその同族語は、様々な構成要素の配列によって成り立つ「構造」や「秩序」を表わすためにしばしば用いられる (cf. *Grg.* 503e6, 504a1, *Tim.* 30a5, 88a3, *Phil.* 30c5-6, *Laws* 665a1-2, 668e2, 903b6)。500c3-6 で諸アイデアが「秩序づけられている」と言われるのも、諸アイデアは、一つの体系的秩序を成すべく構成要素として統合されているからであろう。

人間にとって可能な限り秩序あり神的な者になるのだ (κόσμος τε καὶ θεῖος εἰς τὸ δυνατόν ἀνθρώπῳ γίγνεται)」と。神的で秩序付けられた諸イデアこそが、哲学者がそれを模倣し、自己をそれに似せようと努める対象なのである³⁹。

さらに、(b) を強く示唆する表現は、先立つ VI 490a8–b7 でも登場する。真正の哲学者は「有るもの (τὸ ὄν)」に触れるに相応しい魂の部分によって、それぞれのものの本性を把握するまでは歩みを止めない、この人は「有るもの」に近づき、交わり、知性と真実とを産んだうえで、知識を得て、真実の生を送り (ἀληθῶς ζῶη) 育まれていくのだ、と S. は言う⁴⁰。

しかし、魂は、実在と関わることによって真に有徳なものになるとの考えが打ち出されているのは、*Rep.* だけではない。*Symp.* のディオティマ演説の終結部 (211d–212a)、*Th.* 第一部の「脱線部」(172c–177c) においても、哲学的探究が極まることによって魂は神的かつ有徳なものになるとの考えが、それぞれ違った角度から述べられている。実在 (あるいは事物の本性) に触れることで生じる有徳な者への変化が、*Symp.* では「神に親しい者になること (θεοφιλεῖ γενέσθαι, 212a6)」、*Th.* では「神に似ること (ὁμοίωσις θεῷ, 176b1)」として描かれている⁴¹。もちろん、これらの対話篇で論じられる哲学探究の方法の内実は、文脈に応じてそれぞれ異なっていると考えるべきである⁴²。だが、実在と関わることによ

³⁹ 同趣旨の考えとして、カッリポリスが παράδειγμα として掲げられていると言われる *Rep.* IX 592b1–4 も参照。

⁴⁰ *Rep.* VII, 540c2 も参照。ここで「浄福者の島」に移り住んだ引退後の統治者は、ダイモンそのもの、あるいは「幸福にして神的な者 (εὐδαίμονες τε καὶ θεῖοι)」とみなされる、と言われる。また、X, 613a4–b1 では、徳を行うことで「人間に可能な限り神に似ること (εἰς ὅσον δυνατόν ἀνθρώπῳ ὁμοιοῦσθαι θεῷ)」を心がけるならば、その人は決して神からなおざりにされることはない、と語られる。

⁴¹ *Th.* の「脱線部」で語られている「神に似ること」は、古代のプラトン主義者によって、P. 倫理学の核心を成す考えとみなされてきた。最も有名なものとして、Alcinous, *Didaskalikos* 28, Plotinus, *Ennead* I.2. 英語圏の P. 研究において、この箇所の重要性は長らく見過ごされてきたが (Ryle (1966), 158; McDowell (1974), 174; Bostock (1988), 98–99 で顕著)、近年では重要な論点が様々な論者によって提起されている。特に、「脱線部」で描かれる哲学者の像はカリカチュアに過ぎない (Rue (1993), 87–92) のか、S. その人とは別の P. 的理想像 (Sedley (2004), 67–71; McPherran (2010), 76–79) なのか、あるいは S. 的かつ P. 的理想像と言い得る (Larsen (2019), 4–7) のかは論争的である。

⁴² 特に顕著な違いとして (I) *Symp.* では〈美〉が最高のイデアとみなされているのに対して、*Rep.* ではそれが〈善〉であること、(II) *Rep.* や *Symp.* とは異なり、*Th.* では、「脱線部」においてさえも、イデアが明示的な仕方では登場していないこと、などが挙げられる。どちらも大きな問題であり、本稿で論じることはできないが、(I) に関しては Ferrari (1992), 258–60; Sayer (1995), 165–95、(II) に関しては Cornford (1957), 85; McDowell (1973), 173–77; Burnyeat (1990), 38 の議論が有益である。

ってこそ魂は神的一样な有徳なものになるとの考えを、少なくとも中期以降のP.哲学のあ
る顕著な特徴として取り出すことは、十分可能であろう⁴³。

5. 結びに代えて——「神に似ること」をどのように解するか

では、P.にとって、神に近い者になるとは、あるいは「神に似ること」とは、具
体的にどのような状態に至ることを意味するのか。最後に、この点について簡単に議論した
い。Sedleyは⁴⁴、プロティノス（*Ennead* I.2「徳について」）に従い、「神に似ること」とは、
実質的には、知性を肉体から分離させることによる観想活動への専心を意味し、そこにお
いて、市民としての徳はもはや問題になっていないと論じる。この解釈は、たしかに*Phd.*
における徳に関する見解——真の知（*φρόνησις*）は、魂が肉体を離れたときのみ獲得し
得る（66b–69e）——と相性が良い。P.は、観想活動にのみ打ち込む魂の「純粋な」あり
方を究極の理想として掲げており、肉体的諸要素を完全に捨て去った哲学者の魂のみがそ
こに到達し得る、と考えている可能性は高い⁴⁵。

しかし、「神に似ること」が明示的に語られる *Thet.*においても、同種の変化が語られて
いると考えられる *Rep.*や *Symp.*の箇所においても、話題となっているのは、肉体の内にあ
る哲学者の魂の状態である。特に前節で見た *Rep.* VI の、哲学者の性格が語られる文脈に
おいては、国の内外で生起する個別具体的な状況に際して、正しい判断を下すことを可能
にする徳が問題になっている。このような徳を具えた哲学者を「人間にとって可能な限り
秩序あり神的な者（500d1–2）」と形容する以上、P.にとって「神に似ること」とは、——
たとえ、そこに至るための唯一の道が観想活動であったとしても——身の回りの人々やポ
リスに関わる諸事など、日々の生活を成す「世俗的」事柄を徹底的に切り捨て、観想活動
のみを顧慮するようになる、といったことは意味しないと考えられる。

では、「神に似ること」の内実をいかに説明するべきか。*Rep.* VI, 485d6–e5の「灌漑の比
喩」と、魂の三部分説が、この問題への糸口を与えてくれる。真正の哲学者に必要な素質
について語る文脈で、S.は言う。「しかし、様々な欲望がある一つのものに向かって激し
く流れていっているときには、他のものに対する欲望の流れは、その分弱くなるものだ
という事は、われわれの知るところだろう。これはちょうど、水流がその一つの方向へと、
水路によって引かれている場合のようなものだ（485d6–8）」と。この前提に基づいてS.
は、ひとの欲望の流れが学問に激しく向かうような場合、肉体を通して生じる快樂に向か
う欲望の流れはその分弱まり、そのような人間は、食欲ではなく節度ある者になるだろう、
と語る。

⁴³ Cf. *Laws* 716c–d, 818a–e. *Alc. I* 133c1–6 では魂の中で知恵が生じる部分が「神に似ている」と
言われる。

⁴⁴ Sedley (1999), 322–24.

⁴⁵ この可能性が示唆されている他の箇所として、*Rep.* X, 611d8–612a6.

これに比すべき魂論的説明は、やや異なる文脈ではあるが、S.が詩を聴くことで魂が被る害悪について論じる *Rep. X*, 606d1-7 でも登場する。すなわち、ホメロスなど模倣的詩は、本来枯らさなくてはならない愛欲や怒り⁴⁶などに「水を与える (d4, ἄρδουσα)」。その結果、こうした衝動がわれわれの内なる支配者となってしまふ——われわれが、劣った者ではなくすぐれた者になるためには、本来支配されるべきなのに——と語られる。模倣的詩は、魂の非理知的部分を強化することで、理知的部分の主導による魂の統治を脅かすものとして描かれているのだ。

注目すべきは、S.が X 巻の当該箇所を用いている「水を与える」を意味する動詞“ἄρδευ”は、まさに灌漑の文脈で用いられる語である点だ⁴⁷。たしかに、VI 巻の「灌漑の比喩」の箇所は、*Rep.*全体の枠組みから言えば、哲学者の統治の正当性やその教育の中身が論じられる「脱線部」に属し、ここで魂の三部分説は明示的な仕方では登場していない⁴⁸。しかし両箇所は、われわれの魂が有する様々な側面のうち、いずれを育むべきであるかを論じている点で、大まかな問題関心を共有しているとみなし得る。したがって、次のように言うことは可能であろう。P.にとって、観想活動を通して「神に似る」ことは、魂の理知的部分を強化することをたしかに意味する。しかしこのことは——「灌漑の比喩」で含意されているように、ひとの（心的リソースという意味での）欲望の総量が有限であることを鑑みれば——同時に、非理知的な二つの部分の勢力を弱め、それによって、理知的部分の主導のもとでの三部分間の調和を実現することをも意味するのだ、と⁴⁹。

魂の理知的部分の強化に寄与する活動は、哲学以外にもあり得るだろう。その中で、特に哲学が欲望の「灌漑」効果をもたらすのに最も適した活動とされているのは、P.にとって哲学は、実在の領域のすべてに熱情を向け観得しようとする営みであるため (cf. *V* 475b4-c8, *VI* 485b5-8)、きちんと取り組む場合に要求されるコミットメントの程度が、圧倒的に大きいためであろう。

「神に似ること」が以上のようなことを意味するのならば——Annas の懸念に反して⁵⁰

⁴⁶ X 巻の当該箇所では明示的に対比されているのは、魂の理知的部分と非理知的部分の二つである。しかし、ここで「怒り」に言及されていることから、Penner (1971), 111-13 に反して、問題の非理知的部分は、欲求的部分だけでなく気概的部分も含むものであると解する (cf. Murray (1997), 227)。

⁴⁷ Cf. Herodotus, 2.13-14; Aeschylus, *Persians* 487, 806; Aristotle, *GC*. 335a14. *Rep.*における“ἄρδευ”の用法については、Adam (1902), 416 も参照。この語は VIII 550b1-3 で、いかにして名誉支配制的な人間が誕生するかを叙述する文脈でも用いられ、彼の父親が魂の理知的部分に「水をやりに (ἄρδουτος)」養う一方、他の者たちが欲求的・気概的部分を育む、と言われる。P.における他の用例として、*Phdr.* 276d6, *Tim.* 76a5。

⁴⁸ Costa (2018) は、三部分説は VII 巻の「洞窟の比喩」においても暗に機能していると論じる。

⁴⁹ ὁμοίωσις θεῶν を魂の三部分間の調和と関連付けて解する論者として、Mahoney (2004), 335-36。

⁵⁰ Annas (1999), 70-71。

——「神に似ること」それ自体を、われわれの実人生から過度に遊離した倫理学説を P. に帰する考えとしてみなす必要はない、ということになる。実際、「人間にとって可能な限り秩序あり神的な者」である哲学者を、S. は「端正であり、守銭奴でも、偏狭でも、ほら吹きでも、臆病でもない人間」とみなし、このような人が「つき合いにくく、不正直な人間であることはあり得ないだろう」と言う (VI 486b6–8)。こうした描写は、有徳な人に関するわれわれの通常の理解ともおおむね一致するものであろう。

参考文献

- Adam, J. ed. and comm. *The Republic of Plato*, 2nd ed. Cambridge, 1902.
- Annas, J. *Plato's Ethics, Old and New*. New York, 1999.
- Berti, E. "Is There an Ethics in Plato's "Unwritten Doctrines"?" In Migliori, M. et al. eds. *Plato Ethicus*. Sankt Augustin, 2004.
- Bostock, D. *Plato's Theaetetus*. Oxford, 1988.
- Brisson, L. "Why Is the *Timaeus* Called an *Eikôs Muthos* and an *Eikôs Logos*?" In Collobert, C. et al. eds. *Plato and Myth*. Leiden, 2012.
- Broadie, S. *Plato's Sun-Like Good: Dialectic in the Republic*. Cambridge, 2021.
- Burnyeat, M. F. "Platonism and Mathematics: A Prelude to Discussion." In Graeser, A. ed. *Mathematics and Metaphysics in Aristotle*. Stuttgart, 1987.
- . "Plato on Why Mathematics is Good for the Soul." In Smiley, T. ed. *Mathematics and Necessity*. Oxford, 2000.
- Cherniss, H. F. *The Riddle of the Early Academy*. Berkeley and Los Angeles, 1945.
- Cornford, F. M. *Plato's Theory of Knowledge*. New York, 1957.
- Costa, I. "Platonic Souls in the Cave: Are They Only Rational?" In Boeri, M. D. et al. eds. *Soul and Mind in Greek Thought*. Cham, 2018.
- Ferrari, G. "Platonic Love." In Kraut, R. ed. *The Cambridge Companion to Plato*. Cambridge, 1992.
- Fine, G. *Plato on Knowledge and Forms*. Oxford, 2003.
- Gaiser, K. "Plato's Enigmatic Lecture 'On the Good'." *Phronesis*, 25 (1) (1980): 5–37.
- Gill, C. "Plato, Ethics and Mathematics." In Migliori, M. et al. eds. *Plato Ethicus*. Sankt Augustin, 2004.
- . "The Good and Mathematics." In Cairns, D. et al. eds. *Pursuing the Good*. Edinburgh, 2007.
- Gosling, J. C. B. *Plato*. London, 1973.
- Griffith, T. trans. and Ferrari, G. ed. *Plato: The Republic*. Cambridge, 2000.
- Guthrie, W. K. C. *A History of Greek Philosophy V*. Cambridge, 1978.
- Irwin, T. H. *Plato's Ethics*. Oxford, 1995.
- Kamtekar, R. "The Good and Order: Does the *Republic* Display an Analogy Between a Science of

- Ethics and Mathematics?” In Cairns, D. et al. eds. *Pursuing the Good*. Edinburgh, 2007.
- Larsen, J. K. “Measuring Humans against Gods: on the Digression of Plato’s *Theaetetus*.” *Archiv für Geschichte der Philosophie*, 101 (1) (2019): 1–29.
- Mahoney, T. “Is Assimilation to God in the *Theaetetus* Purely Otherworldly?” *Ancient Philosophy*, 24 (2004): 321–38.
- McDowell, J. trans. and comm. *Plato: Theaetetus*. Oxford, 1973.
- McPherran, M. L. (2010). “Justice and Piety in the Digression of the *Theaetetus*.” *Ancient Philosophy*, 30 (1) (2010): 73–94.
- Moss, J. *Plato’s Epistemology: Being and Seeming*. Oxford, 2021.
- Murray, P. ed. and comm. *Plato on Poetry*. Cambridge, 1997.
- Penner, T. “Thought and Desire in Plato.” In Vlastos, G. ed. *Plato II*. Notre Dame, IN, 1971.
- Reeve, C. D. C. *Philosopher-Kings*. Princeton, 1988.
- Rowett, C. *Knowledge and Truth in Plato: Stepping Past the Shadow of Socrates*. Oxford, 2018.
- Rue, R. “The Philosopher in Flight: The Digression (172C–177C) in the *Theaetetus*.” *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 11 (1993): 71–100.
- Ryle, G. *Plato’s Progress*. Cambridge, 1966.
- Sayre, K. M. *Plato’s Literary Garden*. Notre Dame, 1995.
- Sedley, D. “The Ideal of Godlikeness.” In Fine, G. ed. *Plato 2*. Oxford, 1999.
- . *The Midwife of Platonism*. Oxford, 2004.
- . “Philosophy, the Forms, and the Art of Ruling.” In Ferrari, G. ed. *The Cambridge Companion to Plato’s Republic*. Cambridge, 2007.
- Seel, G. “Is Plato’s Conception of the Good Contradictory?” In Cairns, D. et al. eds. *Pursuing the Good*. Edinburgh, 2007.
- Shorey, P. ed. and trans. *Plato: The Republic*, 2nd edn. Cambridge, MA, 1937.
- Vlastos, G. *Platonic Studies*. Princeton, 1981.
- 川島彬『〈善〉のアイデアと非命題的なもの——プラトン『国家』篇研究——』東北大学出版会、2024年。
- 田中美知太郎『プラトン III』（『田中美知太郎全集』第25巻、筑摩書房、1990年所収）。

後記

本論文は、2024年9月のギリシャ哲学セミナー（於東京都立大学）で発表した原稿に若干の加筆・修正を施したものである。セミナーでは、一色裕、岩田直也、荻野弘之、近藤智彦、高橋久一郎、田中一孝、千葉恵、豊田泰淳、中畑正志、納富信留の諸氏から、Burnyeatに解釈（4）を帰すことの是非、解釈（3）と（4）の関係、プラトンを解釈（3）の立場で解することの是非、統治者の初等教育と本稿の立場との関係、*Rep.VI*,

500c-d における哲学者の知の状態の内実、プロティノスとの比較、アリストテレスとの比較などに関して、有益なご質問を多数頂戴した。いずれも大きな問題であり、本稿では十分には対応できなかったが、論旨と特に深く関わる点であるため、解釈（3）と（4）の違いの明確化には務めた。当日司会を担当してくださった田中伸司氏と発表の内外で貴重な示唆を与えてくださった皆様に、大きな感謝を申し上げたい。